

# 京都大学－琉球大学合同デザインスクール＋洋上ワークショップ 実施報告

2013年12月16日

石田 亨

## 1. 概要

沖縄那覇の地で、琉球大学と合同でデザインワークショップを行う。那覇は京都とは異なる文化を持つ琉球王国の都であり、観光などの共通の課題や、環境など独自の課題がある。合同でワークショップを行うことで、新しい問題の発見と解決策を見いだす機会とする。また、沖縄に向かう船の中では、洋上デザインワークショップを行い、ファシリテーションを学ぶ。

## 2. 日程

2013年11月21日（木）～11月25日（月）

## 3. スケジュール

11月21日（木）	伊丹空港から飛行機で鹿児島空港へ 鹿児島新港から船で沖縄へ（船中泊）
11月22日（金）	洋上にてワークショップを実施 夕刻 那覇港に到着
11月23日（土）～ 11月24日（日）	琉球大学にて京都大学－琉球大学合同デザインスクールに参加
11月25日（月）	フィールドワーク 夕刻 那覇空港から飛行機で関西国際空港へ



【船上から】

#### 4. プログラム

##### 4.1 洋上ワークショップ（於 船上）

<11月21日（木）>

##### ワークショップ1 「デザイン学を発想する」（講師: 石田、十河）

前半: 18:30~19:10（40分）

後半: 19:10~19:50（40分）

概要: 京大デザイン学の目指すべき姿を、異領域の専門家の協働、デザイン手法の多様性という観点から議論する。



[ワークショップ]

<11月22日（金）>

##### ワークショップ2 「ファシリテーションを体得する」（講師: 寺田、中川）

前半: 10:00-10:50（50分）

後半: 10:50-11:40（50分）

概要: ファシリテーションの基本的な心構えを、ブラインドウォーク、ミラーストレッチなどを通して習得する。



[ブラインドウォーク]



[ミラーストレッチ]



[聴き方の練習]

### ワークショップ3 「Creative Design」(講師: 須永)

12:40~13:30 (50分)

概要: ワークショップのゴールを可視化することで、グループワークのプロセスをゴールから逆向きにデザインする手法を学ぶ。



### ワークショップ4 「沖縄と観光を理解する」(講師: 伊沢、笠原)

前半: 14:30-15:20 (50分)

後半: 15:20-16:10 (50分)

概要: 沖縄の現状を各種の統計データなどから理解する。また、外国人観光客にとっての課題や観光資源など、観光を考える際の要点を学ぶ。



## 4.2 京大ー琉大合同デザインスクール（於 琉球大学 千原キャンパス 大学会館）

概要: 京都大学、琉球大学、那覇国際高校の参加者が7つのグループに分かれ、2日間で沖縄観光に関わる2つのテーマに取り組む。各グループには1名または2名のデザイン学本科生が参加し、ファシリテーターとしてグループ内の議論をリードする。

### <テーマA>郷土愛と沖縄観光を両立させるための「街並み」デザイン

#### 課題内容:

県外・国外に出ている沖縄県出身者は「沖縄系3世」「県系2世」と自らを称し、沖縄出身であることそのものに誇りや身近さを感じたり、沖縄コミュニティに属することで比較的高頻度で顔を突き合わせた交流を持つことが少なくない。他都道府県ではあまり見られないと思われるが、このような郷土愛を持つのは何故だろうか。

その一方、建造物や街並みなどは戦争の影響が強いことは否めないが、戦後復興においては琉球瓦等の沖縄らしい素材・組み合わせ・外観を気にすることなく、セメント建ての建造物が増え続けており、結果として沖縄らしい街並は一部に残すのみとなってしまった。

技術の継承・向上も問題ではあるが、ここではそのような郷土愛に根ざし、観光を後ろ盾とする街並み(街づくり)を目指すための問題点を洗い出し、必要ならば何を捨て、何を守るべきか、それらを踏まえてどのような施策を講じるべきかを具体化するデザインワークを行う。

### <テーマB>外国人観光客の満足度をあげるための「おもてなし」デザイン

#### 課題内容:

観光立県を掲げている沖縄県では、その活発具合や需要・満足度等を把握するために様々な調査が継続して実施されている。平成24年度外国人観光客満足度調査報告書によると、例えば満足率について、「おもてなし」は高いが、「外国語対応」等は低い。といった傾向が示されており、結果として、満足率は66%に留まっている。

「おもてなし」は2020年東京オリンピックを特徴づける一つのキーワードとして広まりつつあるが、沖縄の「おもてなし」に欠けているのは何か。京都の「おもてなし」と何が違うのか。ただ単に、他府県と同じ「おもてなし」を真似すれば良いのか。

空路・航路共に最大のショッピングエリアである国際通りにおけるフィールドワークなども交え、ヒト・モノ・カネ・情報などを問わず、外国人観光客に対する満足度を改善するために、沖縄が目指す理想的な観光のあり方(=おもてなし)について具体化するデザインワークを行う。

<11月23日(土)>

9:30-9:40 オープニング

- ・琉球大学 工学部 情報工学科・宮城隼夫教授
- ・京都大学大学院 情報学研究科 社会情報学専攻・石田亨教授

9:40-9:45 全体の流れ

- ・琉球大学 工学部 情報工学科・遠藤聡志教授

9:45-10:50 基調講演

- ・琉球大学 観光産業科学部 観光科学科・下地芳郎教授

10:50-11:00 全体の流れ解説(遠藤教授)

11:00-12:30 グループワーク1回目

12:30-13:30 昼食休憩

13:30-14:30 グループワーク2回目、フィールドワーク目的・場所検討

14:30-14:45 ミニ発表 or 交流タイム

14:45-15:00 フィールドワーク調整

15:00-(17:00) グループワーク3回目(フィールドワーク、現地解散)



[オープニング]



[基調講演]



[グループワーク]

<11月24日(日)>

9:30-12:00 グループワーク4回目 (フィールドワーク整理、プレゼン準備)

12:00-13:00 昼食休憩

13:00-14:30 グループワーク5回目 (プレゼン準備)

14:30-14:50 コーヒーブレイク

14:50-16:50 発表会

17:00 クロージング

- ・琉球大学 工学部 情報工学科・宮城隼夫教授
- ・沖縄人財クラスタ研究会・白井旬氏
- ・京都大学大学院 情報学研究科 社会情報学専攻・石田亨教授



[発表会]



[表彰式]

## 5. 参加者

### ■洋上ワークショップ

#### <本科生>

デザイン学本科生 8名

#### <教員他> 8名

教員 4名

職員 1名

ファシリテーター 2名

アドバイザー 1名

### ■京大ー琉大合同デザインスクール

#### <学生> 31名

京都大学デザイン学本科生 8名

琉球大学理工学研究科情報工学専攻修士 8名

琉球大学理工学研究科総合知能工学専攻博士 1名

琉球大学工学部情報工学科 4回生 6名

琉球大学工学部観光産業学部観光科学科 3回生 1名

沖縄県立那覇国際高等学校 7名 (1年生 2名、2年生 5名)

#### <教員他> 19名

教員 10名 (京大 4名、琉大 6名)

職員 3名 (京大 1名、琉大 2名)

ファシリテーター 2名 (京大)

アドバイザー 1名 (京大)

NPO 3名 (参加者 1名、コーディネーター 2名)

## 6. アンケート

本科生および教職員にアンケートを実施し、計 13 名から以下の回答を得た。

### 【問 1】

合同デザインスクールでの活動の内容と所感を、特に印象に残ったことを中心に記載。

### 【回答（学生）】

今回のデザインスクールでは、ファシリテーションの一端を学ぶことができたように思う。ファシリテーションとは、参加者の思いをよく汲み取り、また各々が考えを尊重し合え、高いパフォーマンスを発揮できるような場作りを行うことである。その方法は一つではなく、人によって様々な行い方がある。例えば、アイデアをたくさん出し合い、それらを次々と結び付けて考えてみる、という場を、暫定的な目的と共にとにかく与えてしまうという方法がある。アイデアや意見が飛び交い、チームに熱が生まれてくれば、暫定的な目的からは自然と逸れてゆく。これは寺田さんのご指導の元、今回行われた。

ファシリテーションを学ぶ流れとしては、まずは前半の洋上ワークショップでこれについての講習を受け、後半のデザインスクールでそれらを実践してみるというものであった。実際、後半には、少しではあるが自分なりにファシリテーションを行ってみたつもりである。

例えば、チーム内で現在最も勢いのある(ように見える)アイデアに、少しでも違和感を持っている人がいないだろうか観察したり、あえて対立するアイデアを出すなどを行ってみた。これの効果があつたのかは残念ながら分からない。しかし、結果的には優秀賞を頂いたり、皆楽めたようで、チームとして上手くいったのは良い経験であった。

(井上裕昭・情報学研究科 M1

合同デザインスクールでの役割：ほぼプレーヤー)

鹿児島から丸一日かけて沖縄へ。本当に船で行く必要はあつたのか？という疑問が残ったのはさておき・・・。

琉大との合同デザインスクールは2日という過密日程ではありましたが、とても中身の濃いものでした。私は『郷土愛と沖縄観光を両立させるための「街並み」デザイン』のテーマに取り組みましたが、ディスカッションの中で、地元沖縄の方の視点と観光客としての京大側の視点の意外な相違点が浮き彫りになりました。そのギャップから問題点を洗い出し、両者の視点が変わる解決策を模索していくプロセスの経験は新鮮で有意義なものでした。また、ファシリテーションについても学ぶ機会が多く、ここでも他者の視点を考える重要性を感じる事が出来ました。

自分の専門性や視点が他者の専門性や視点がぶつかることで見えてくる問題点、両者が交わることで生まれるアイデアの新規性や奥深さにデザイン学がもつおもしろさやパワーが凝縮されていることを感じた5日間でした。

(市村 賢士郎・教育学研究科M1  
合同デザインスクールでの役割：?)

琉球大学や沖縄国際高校の皆さまとともに、沖縄の課題に取り組んだこと自体が、大きな成果だと思います。私たち京都から来たヨソ者を暖かく受け入れていただき、沖縄の「優しさ」を感じる2日間でした。

地元の大学生や高校生という若者目線でみた沖縄、私たちヨソ者目線で感じた沖縄、それぞれの目線の違いから普段気づかない沖縄の良さや問題点を発見できました。2日間のワークショップで「観光」や「まちなみ」という複合的課題の最適解を求めることは難しいですが、両者の差異を理解することで、納得解に繋がる新しいデザインへの示唆を得ることができました。

私の参加したチームは、多摩美術大学の須永先生にファシリテートいただきました。普段は論理的思考を使った問題解決をすることが多い中で、「街で画板とクレヨンを手でスケッチで描く」、「沖縄の優しさについて対話する」、「体験を日記に書き綴る」といった感覚的思考を駆使したワークを行ったことは、私に新鮮なインスピレーションと思考の幅を与えてくれました。これらの手法は、まさにデザインの本質である「よく観察する」ためのトレーニングにも繋がると思います。私は、大学でエスノグラフィー手法を使ったサービスの調査を行っており、現地を観察しながら文化を記述するフィールドワークを行いますが、須永先生の取られた手法は、それを絵で表現するもので、観察する点では親和性があります。観察することの深さを感じました。

論理的思考と感覚的思考の両面でアプローチすることは、複合的な課題解決にきっと役立つと確信しました。京都大学デザインスクールは「デザイン」と名のつく以上、観察する力を養う目的で、デッサン等の基礎トレーニングを行う場があればよいと思いました。

貴重な時間と場を与えてくださった沖縄の皆様、京都の皆様に改めて感謝申し上げます。

(北野 清晃・経営管理大学院 M2  
合同デザインスクールでの役割：参加者 (こっそりファシリテーター))

参加テーマ：「郷土愛と観光を両立する街並のデザイン」

切り口の多い難しいテーマでしたが、参加者の想いや体験を大切にしたいという思いから、部外者である私たちの視点も交え、沖縄らしいと思うもの、好きなものについてのブレス

トからワークをスタートさせました。ディスカッションやフィールドワークを行っていく中で「郷土愛」とは何か？という素朴な疑問に直面し、それが最後まで議論の中心であったように思います。最終的には、沖縄を想う心、郷土愛を育めるような街歩きの仕組みを提案し、沖縄独自の大切なものを見過ごさないことが街並を守ることへの第一歩ではないかという結論に至りました。実際は最後の最後まで意見がまとまらず、苦しみましたが、2日間で得たもの、感じたことの振り返りをじっくり行った中で生まれた提案は、その善し悪しはともかく、自分達の等身大の経験に基づくデザインであったように感じます。残り2時間で方向性が決まってからのチームのまとまりと、メンバーの集中力がとても印象的でした。

個人的な活動としては、ファシリテートを意識してワークに参加しました。当然ではありますが、予想していた通りには進まないワークショップをファシリテートするにはまだまだ引き出しが少なく、力不足を感じることも多々ありました。周りの助けを借りながらではありましたが、最終日に、参加してくれた高校生に「本当に楽しかった、来てよかった！」と言ってもらえたことはとても嬉しい経験でした。他チームで同じような苦勞をしたであろう本科生とも経験を共有し、今後の課題の一つとしていきたいと思っています。

総じて、私たちにとって学びの多い合同デザインスクールであったと感じております。

(佐藤那央・経営管理大学院 M1  
合同デザインスクールでの役割：ファシリテーター (??))

全てが印象深く、焦点を絞って述べることは非常に困難ですが、活動内容と所感について時系列に沿って記入します。

・11月21~22日(木~金)@船.

船という閉鎖空間に一日居たことで、沖縄がどれほど遠いかの実感ができるだけでなく、まだ良く知らない人同士がしっかりと交流の場も持てたという意味で、なくてはならない一日だったと考えます。

・11月23日(土)@琉大. ワークショップ1日目

琉大生、那覇国際高校生、そして京大組が初めて顔を合わせた日。

お互いがお互いをよく知らない中、非常にタイトなスケジュールだったため、自己紹介しつつテーマについての話し合いもしつつ、口を閉ざすことがないほど活発に意見を交換し合ったことが印象的です。特に、私のグループは沖縄組の方々のテーマに対する意欲が非常に強く、こちらが時折気圧される場面もあったほどでした。ただ、ディスカッションの中で意見の方向性が各自異なっていたため、全員一致の提案を出すことが難しく、フィールドワーク後、一日の終わりに際して遂に全員一致とも思える妙案がぽこっと生まれた時には、涙が出そうになりました。その意味で、フィールドワークの重要性を再認識

できたことも収穫でした。また、ワークショップ終了後、京大組の人たちとこの日の反省と明日への課題を徹底的に議論できたことも、自分のグループだけにとどまらず多角的な視野を持てるという意味で非常に有意義でした。

・11月24日(日)@琉大。ワークショップ2日目

沖縄組と京大組がお互いのことを基本の「き」ほど把握した二日目。

発表の準備のため議論にあまり時間が割けない中、相当濃密なディスカッションをしたことが印象に残っています。もう少し時間がほしかったという思いもありますが、あまり冗長になってもダレが出るため、集中力を切らさないという意味では、初めて会う人たちとのワークショップでは、これくらいタイトなほうが良いのかもしれませんが。発表スタイルも各グループの特色が出ており、pptのみを用いる発表だけが発表のスタイルではないことを身をもって学習でき、良かったです。

・11月25日(月)京大組のみの沖縄フィールドワーク@ひめゆりの塔・斎場御嶽

沖縄の歴史を学ぶことで、ワークショップとは違った視点から沖縄を深く考える良い機会となりました。

特にひめゆりの塔での経験を踏まえ、単純に「辛かっただろう」で終わらせるのではなく、それでも米軍基地を拒絶せず、その文化をちゃんぷるーにってしまう沖縄の人々の在り方について、広い見地から考えていく必要があると痛感しました。

どの日もあまりに濃密で、まだ自分の中でこの体験が何であったのかについて、消化しきれれておりませんが、得難いものであったことは間違いありません。

(藤田 弥世・教育学研究科 M1

合同デザインスクールでの役割：ファシリテーター)

今回の琉大 - 京大合同デザインスクールに参加し、以下の二点が特に印象に残った。

一つ目は、ファシリテーターという役割の難しさだ。今まで、私はワークショップなどでこのような役回りを行ったことがなかった。何をしたらいいのかもわからなかった。しかし、洋上での講義を通し、なんとなくではあるがファシリテーターの役割を自分の中で輪郭を持たせ、ワークショップに望むことができた。そこから実際に自分がグループの中に入りやってみると、思い描いていたようには行かず、役割からそれてしまうこともあった。そんな中でも、同じグループのメンバーとの共同作業や、助け合いにより、最終的には素晴らしいアウトプットを大変おもしろい形で表現できたと感じている。修士1回生の段階でこのような機会が持て、満足している。そして、これからもこのような機会を逃さず学んで行きたい。

二つ目は、メンバーの学びに対する意識の高さだ。ワークショップに集まった人たちは、皆何かを学びに同じ場所に集まり、各人が一つの目標に対して非常に意欲的に取り組んで

いた。特に、高校生の、積極性が心に残った。彼女らは、自らこの企画に応募し、グループの中でも大事な役割を担ってくれた。自分が彼女らの年齢のときには、持っていない意識の高さとそれを支える能力に非常に驚かされた。そして、同時に沖縄、日本に彼女らのような高校生がいると知れたことは、自分のこれからの生活に大きなモチベーションになると感じている。

最後に、一言で今回のワークショップの感想をまとめると、とても楽しかったです。

(古田 幸三・工学研究科 機械理工学専攻 M1  
合同デザインスクールでの役割： B1 班 ファシリテータ)

今回の琉球大学-京都大学合同デザインスクールは、様々なワークショップ活動の学習と経験の場になりました。24 時間以上かかる船舶での沖縄への移動中は、複数の先生・社会人の方々によるファシリテーション講習を受け、また講習外の時間も会話や意見交換によってワークショップにおける手法や、社会で行われている活動の現状を学ぶ事ができました。また、京都で行われている観光業の事例や、沖縄の社会の現状や人々の考え方などを専門の方々からお話し頂き、現地でのワークショップ活動を行うための予備知識を養う機会にもなりました。

沖縄に到着し、翌日から琉球大学の会場でデザインスクールが始まりました。私のグループは「外国人観光客へのおもてなし」がテーマであり、今までに見かけた外国人観光客の話、また自分がもてなされた経験を互いに出し合う事から始めました。話し合いの結果、沖縄の伝統的な、また各国の文化の影響を受けている染色技法である「紅型」の体験教室を通じて沖縄と各国の共通点や親しみを感じてもらえないか、そして再び沖縄に観光に来ようと考えてもらう事が「おもてなし」になるのではないかという案を出しました。方向性が実際に体験教室を行っている場所に赴き、外国人向けの教室があること、しかしそれには文化的な背景を伝える事はあまり盛り込まれていない、等がわかりました。これらの現状を踏まえた協議を行い、各国の文様などを紅型で染色してもらえるサービスを最終的な発表の場で提案しました。

今回のワークショップは個々のメンバーの分野の違い以上に、様々な年齢のメンバーとの協議を行えた事が印象に残りました。下は高校 2 年生、上は 1 つ 2 つ世代が上の社会人の方々でしたが、下も上も遠慮なく世代を越えての意見の交換をすることで、デザインスクールの目的の 1 つである社会の問題発見・解決を行うことが出来る可能性を垣間見る機会となりました。

(堀 友彌・情報学研究科社会情報学専攻 M1  
合同デザインスクールでの役割：学生メンバー兼グループリーダー担当)

【回答（アドバイザー・教員・ファシリテーター）】

今回の合同デザインスクールにはアドバイザーとして参加させて頂いた。沖縄へは過去何度も訪問してきたが、交流は観光業に従事している方に限られていた。今回のように沖縄の学生さんたちと2日間通して同じテーマを議論するという機会は初めてで、貴重な体験だった。このような得がたい機会を頂いた事にまず感謝したい。

所属グループの参加者はいずれも積極的だった。なかでも、周到的な事前準備に基づいた光関係者へのヒアリング実施や、我々のソリューション提案の中心となった国籍別紅型デザインの作成など、議論を進める役割を自ら引き受ける沖縄側参加者の意欲的な態度は非常に印象的だった。こうしたヒアリングやデザインがなければ、我々は最終プレゼンを行うことができなかった。

残念ながら時間の都合もあり、京都と沖縄の観光をどのように結びつけていくかまでは十分議論ができなかった。しかし、我々が注目した紅型は京友禅の特徴を取り入れた技法であり、京都と沖縄を結びつけることができる。情報通信技術の進歩により、地域間の提携は以前よりも容易になっており、今回のワークショップをきっかけに、両者がお互いを補い合う形での観光提携を実現していきたいと考えている。

（笠原秀一・情報学研究科 D3

合同デザインスクールでの役割：アドバイザー）

京都大学と琉球大学が共同的に「デザイン」を学ぶプログラムに参加した。プログラムは、琉大大会館と那覇市内周辺で実施され、京大と琉大のメンバーが共同するグループ構成でのスクーリングとなった。京大メンバーは、鹿児島から那覇までの2日間（約24時間）の船舶移動中にデザインについて考え体験する洋上ワークショップを実施。

私の参加目的は「Creative design」のアプローチをこのプログラムに提供することであった。「Creative design」のアプローチの基礎にある「視覚的思考 Visual thinking」とそこから展開するデザイン（構想し、造形し、設計する）の方法を教示。ここでは、参加者が実際にそのアプローチを体験することをおして、そのデザインが「できること」とその方法が「わかること」を目指した。

合同デザインスクールで、私が参加した活動の内容について述べる。

洋上ワークショップで提供したのは「到達点を描いてみる Envisioning the goal」という「視覚的思考 Visual thinking」の課題である。翌日から始まる2日間のデザインの到達点を「一気に（深く考えないで）」描いてみる作業である。2名ひと組になりそれぞれのゴールイメージを描き、発表。描かれたゴールから、参加者は、現実にかき起こるであろう「デザインの流れとやるべきこと」をイメージでき、そこから合同プログラムに参加する心の準備ができ

たはずである。

11/23（土）の朝、琉大大会館に集合。合同デザインのテーマは「沖縄観光（2020年の沖縄観光を描いてみる?）」。そのためのキーワード「郷土愛」「街並」「おもいやり」が設定された。集まった全員で、琉大下地先生の「沖縄観光の歴史とビジョン」に関する講演を拝聴するところからスクールが始まった。

「街並」組3班のメンバーは、琉大の学生3名、職員1名、高校生1名と私。このグループで私は、デザインを言葉で教示するはなく、「いっしょにデザインする」というやり方で、参加者にデザインすることの楽しさを味わってもらうことに徹した。2日間のデザイン活動は次のように展開。デザインの目的は、そのアウトカムが、沖縄観光にかかわる人びとの体験（一人称の視点）に結びつくことである。そのために、このアプローチでは「自分の体験を見つめること、一人称の視点の豊かさにきづくこと、そして自ら表現してみることを」を大事にした。

(1) 1日目。なぜこのプログラムに参加したの？ここで何を学ぶことを期待しているの？

→観光について考えてみたい。デザインを学びたい。

(2) 沖縄での自分の「良い体験」を話そう。京大メンバーも、那覇到着後の体験を紹介

→「良い体験」に共通していたのは『やさしさ』

(3) お昼、私が、沖縄そばを食べながら美術と「情報デザイン」の話し

(4) 『やさしさ』に焦点をあて、午前に話した「良い体験」の作文づくり。朗読

→6人の作文から、4つの成分を抽出。「開かれていること（のやさしさ）」「普段着（のやさしさ）」「いろいろなつながり（のやさしさ）」「相手とのかかわり合い（のやさしさ）」

(5) 那覇の壺屋（やちむん通り）の「街並」に中に、「開かれ」「普段着」「つながり」「相手」を感じるモチーフを探す。見つけたらスケッチ。厚口画用紙と高級パステルが「色を塗ることの楽しさ」を提供し、表現することをファシリテート

→8枚のスケッチ

(6) 国際通りのカフェで、創作した『やさしさ』の源と感じた具体物の表現を「沖縄観光」につなげる道筋を議論

→道筋；「4つの成分～『やさしさ』～「沖縄の街並」～「沖縄観光」を見いだす。そこから、「街並」から感じた『やさしさ』の4成分で構成する「絵本」創作を考案。デザインコンセプト；沖縄に住んでる人びと、訪れた人びとが見つめる『やさしさ』を表現した絵本が、沖縄観光を促進することを構想。

(7) 2日目は、描いたスケッチ全部を会場の壁に提示。それを眺めで絵本づくり計画を皆で策定。スケッチを核にした6頁は「はじめに・目次・スケッチ・編集後期・奥付・表紙」で構成。作業を分担して一気にスタート。

(8) 用意された模造紙の半分のサイズで、絵本をプロトタイピング。グループのテーブルから会場のステージに作業場所を移し、全部の頁を広げての創作作業。

(9) 完成した頁を、外光の入る場所で撮影。画像データをPCでスライドにして編集。

(10) プレゼンテーション。

→グループのデザインはオーディエンスに伝わったかな？ 他グループの発表を聴いて、自分たちのグループが展開したデザインの面白さに気づいたはず。

(須永剛司・デザイン学ユニット特任教授／多摩美術大学教授  
合同デザインスクールでの役割：ファシリテーター)

合同デザインスクールにおける私の最大のミッションは、洋上ワークショップの40分でファシリテーションのエッセンスを伝えることでした。そう、まだ、「合同」になる前の準備段階がハイライトだったのです。資料を使えないこと、船の上で実施することなど、ワークに参加した方同様に、講師の私にとっても、新しい体験が多くありました。良い環境と言えない中でのワークが、その後の合同デザインスクールのグループワークにどのように活かされるのか？という少しの不安より、「ミッション終了！」の高揚感の方が大きい状態で沖縄に上陸したのを覚えています。

合同デザインスクールでは、グループワークの組み立てや手法は各グループに任せることにし、「困ったとき」や「どうしようもなくなったら」介入するというスタンスを取ることにしました。「頼れる人」を演出しようとしたのですが、どうだったでしょうか？この演出に失敗したのか、結局、私のファシリテーターとしての出番はなく、ずっと一参加者としてグループワークに参加していました。出発前には「どうやって4つのグループを見ようか？」「どうやってグループワークを設計しようか？」「アウトプットの形はどんなんだろう？」と、様々な不安があったのですが、ふたを開けてみれば、京大生のみなさんが主体的に考え、動き、それぞれの形で結論を導いていました。「案ずるより産むが易し」ということを改めて体験できた機会でした。苦しみながら、でも楽しんで、挑戦していく姿勢を大事にしたいなと思える機会にもなりました。

さて、学生のみなさんは一体何を学んだのでしょうか？実は学生のみなさんよりも、私の方が収穫が多かったのではないだろうかと思っています。次につながる「何か」を掴んだ瞬間に立ち会っていったのなら、とても嬉しいです。みなさま、どうもありがとうございました。

(中川智絵・パブリック・ハーツ株式会社  
合同デザインスクールでの役割：ファシリテーター)

デザイン学に入学する学生たちが「異文化を体験し現場で問題を発見し解決する」、そういう企画ができないかと考えていた。すぐ、沖縄が思い浮かんだ。京都と那覇は共に一国の首都だった。そうだ京都から那覇に行こう、船で。

年度末のあわただしい時期に、僅かに予定が入っていない日があった。ここしかないと思い、琉球大学の宮城先生にメールを書いた。「急で申し訳ありませんが、3月11日～13日に那覇にお伺いいたします。」3月4日のことだった。ショートノーティスに先生も当惑されただろう。それにも関わらず丁寧なお返事を頂き、3月12日に琉球大学を訪ねた。遠藤先生も参加したミーティングの時間は2時間ほどだったろうか。京都大学のデザイン学大学院連携プログラムをご説明し、サマーデザインスクールをご説明し、琉球大学－京都大学合同デザインスクールをご提案した。唐突な感は否めないが、興味を持っていただけたようだ。ただ、京大側は日程も限られている。恐るおそる11月祭のときに伺いたいとお願いした。

よくお引き受け頂いたと思う。それどころか、9月のサマーデザインスクールには、遠藤先生や當間先生も見学に来られた。数回のスカイプミーティングで粗筋を付けていく。京大サイドは学生が何名行くのかも分からなかった。意向調査をすると、幸い8名の手が挙がった。琉大のメンバー構成も徐々に固まっていた。洋上ワークショップはイメージがなかった。船の様子も十分には分からない。揺れるのだろうか、ワークショップはできるのだろうか。一緒に行ってくれるファシリテーターを探していたが、中川さんと寺田さんが手を上げてくれた。内閣府で沖縄担当をしていた伊沢さんに加えて、観光に詳しい笠原さんも参加してくれた。最後に須永先生が参加表明されて陣容は固まった。

2日間のワークショップは奇跡であったと思う。下地先生のご講演のあと、初対面の学生たちに高校生も加わり7チームが構成された。京大側の教員は分散してチームに参加させて頂いたが、琉大側は先生方は運営にかかりきりだった。京大の学生はいつの間にかファシリテーター役になっていた。2日目の発表が終わり、琉大の先生方のお誘いで沖縄料理を頂いた。何から何までお世話になった。ワークショップで学んだことは、沖縄の"ゆいまーる"の心だった。大学で、街で、心地よい日を過ごさせて頂いた。今度は、琉大の方々を京都にお迎えしたいものだ。

(石田 亨・情報学研究科教授  
合同デザインスクールでの役割：オーガナイザ)

【問2】 今回のデザインスクールは何だったと思えば適切でしょうか

【回答】

	学生1	学生2	学生3	学生4	学生5	学生6	学生7	集計		
								Yes	No	?
問題発見型・解決型学習	?	Yes	Yes	?	Yes	Yes	Yes	5	0	2
ファシリテーション講習	Yes	Yes	Yes	Yes	Yes	Yes	Yes	7	0	0
フィールドインターンシップの準備	?	No	Yes	?	Yes	No	Yes	3	2	2
	教員・ファシリテータ他 <sup>1</sup>	教員・ファシリテータ他 <sup>2</sup>	教員・ファシリテータ他 <sup>3</sup>	教員・ファシリテータ他 <sup>4</sup>	教員・ファシリテータ他 <sup>5</sup>	教員・ファシリテータ他 <sup>6</sup>		集計		
								Yes	No	?
問題発見型・解決型学習	No	Yes	Yes	Yes	Yes	Yes		5	1	0
ファシリテーション講習	Yes	Yes	Yes	Yes	Yes	Yes		6	0	0
フィールドインターンシップの準備	?	Yes	No	No	?	Yes		2	2	2

【問3】 来年度に向けて

【回答】

	学生1	学生2	学生3	学生4	学生5	学生6	学生7	集計		
								Yes	No	?
来年も実施すべきである	Yes	Yes	Yes	Yes	Yes	Yes	Yes	7	0	0
船で行くべきである	No	No	No	Yes	Yes	No	No	2	5	0
テーマは観光で継続すべきである	?	?	No	?	No	No	No	0	4	3
来年も参加したい	Yes	Yes	Yes	?	Yes	Yes	Yes	6	0	1
	教員・ファシリテータ他 <sup>1</sup>	教員・ファシリテータ他 <sup>2</sup>	教員・ファシリテータ他 <sup>3</sup>	教員・ファシリテータ他 <sup>4</sup>	教員・ファシリテータ他 <sup>5</sup>	教員・ファシリテータ他 <sup>6</sup>		集計		
								Yes	No	?
来年も実施すべきである	Yes	Yes	?	Yes	Yes	Yes		5	0	1
船で行くべきである	Yes	Yes	No	Yes	Yes	Yes		5	1	0
テーマは観光で継続すべきである	Yes	Yes	Yes	No	Yes	Yes		5	1	0
来年も参加したい	No	?	Yes	Yes	Yes	Yes		4	1	1